

第十三章 川越市民にとってのサツマイモ感覚の変化

◆ 消えた悪口

太平洋戦争前のこと、川越の者がよそへ行くと、その人に「どこからきたの？」と聞かれる。

正直に「川越から」と答えると、「ああ、いも男か」とか、「いもねえちゃんだ」などとかかわれることがよくあった。だから、「東京だ」と言うと、「その、どこ？」となり、困ったものだったという話をわたしは川越市内でよく聞かされた。

だが、太平洋戦争後生まれの人たちは、そんな昔のことなどはまったく知らないようである。

それどころか東京の人に、「こんど川越に引っ越すことになった」と言えば、「あら、そうよかったわね。そっちに行ったら、おいしいおいもさんが食べられて」となってきた。

九十歳になったわたしは、三年前から近所に来たデイサービス施設に通っている。そこに来ている人たちに、そんな話をしたことがある。

するとすぐ「そうそう。うちも毎年、秋になると川越のいも掘り観光農園に行っているよ。そこで孫たちと掘ったイモを、東京の知人や東北の親類などに送ってやっているよ」となった。

◆ 出前授業

わたしがサツマイモ資料館で働いていたときのこと、四月下旬から五月上旬にかけての休日（火曜）は、川越市内の小学校に出かけることが多かった。それはその学校農園で、二、三年生にサツマイモ苗の植え方を教えるためだった。

根のない苗を畑に植えれば根が出てくる。子供たちにとっては、それが不思議でしようがないようだった。

その作業が一段落すると、若い女の先生方がよくこんな話をしてくれた。「年配の先生方によれば、むかしはサツマイモはありがたくないものだったそうですね。いまは、日本中のどこに行っても、川越から来たとなれば、「あら、うらやましい。おいしいおイモがたくさんあるところでしょう」となる。だからこっちは胸を張って「そうです、そうです」となる。だって日本中の人々が川越と言えばサツマイモとおもってくれているのですから」と。

◆ 川越市立博物館の第四十五回企画展「川越とサツマイモ」

川越にあった「サツマイモ資料館」が国内だけでなく、世界のさまざまな国からも集めた収蔵品のすべては、二〇〇八（平成二十）年に閉館するとき川越市立博物館に寄贈された。それから十年後の二〇一八（平成三十）年の秋のこと、川越市立博物館がその中の主な物を展示品の中心とする上掲の特別展を開いてくれた。

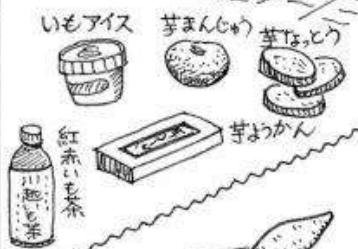
わたしはその図録に「川越のサツマイモが有名になるまで」という特別寄稿文を書かせて

もらうことができた。

同展は好評で来館者も多かった。とりわけ嬉しかったのは沖縄県嘉手納町のイモヅルの会「でいびーる（イモでーす）」の伊波勝雄先生や事務局長の石川護さん達が来てくれたこと、さらに茨城県からは干し芋の歴史文化をまとめた本を出版した先崎千尋さん達も来てくれたことだった。

川越市

観光地としてイモ商品があふれている

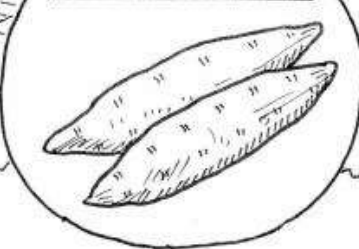


さいたま市

紅赤研究会が発足して紅赤づくりが復活し、各種の紅赤スイーツが売られている



紅赤の保存



三芳町

生産者による三芳町川越いも振興会(約30軒)



紅赤の産地
本場中の本場
三芳町の上富には『^上富の川越いも』のいも街道がある

いも街道

